



**Ginette
NEVEU**

plays
**BEETHOVEN
BRAHMS**
✱

Violin Concerto

Conductor :

*Hans Rosbaud
Roger Désormière*

ジネット・ヌヴェー

Ginette NEVEU

CD 1

ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven 1770 - 1827

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61

Violin Concerto in D major, Op. 61

- ① Allegro ma non troppo 23:51
- ② Larghetto 9:51
- ③ Rondo: Allegro 10:18

指揮：ハンス・ロスバウト

Hans Rosbaud

南西ドイツ放送交響楽団

SWDR-SinfonieorchesterLive: 25 September 1949

CD 2

ブラームス

Johannes Brahms 1833 - 97

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77

Violin Concerto in D major, Op. 77

- ① Allegro non troppo 22:19
- ② Adagio 9:29
- ③ Allegro giocoso 8:20

指揮：ロジャー・デゾルミエール

Roger Désormière

フランス国立放送管弦楽団

Orchestre national de la Radiodiffusion française

Live: 25 April 1948



ジネット・ヌヴェー ー伝説のヴァイオリニストー

“ジネット・ヌヴェー、それは音になった炎、仄暗くも青白く白熱する炎だった。そして今、コクトーの語るように、その銅像の眼は光となってわれわれを天上から見降ろしている”

50年前の1949年10月29日、今世紀の最も優れたヴァイオリニストのひとりであるジネット・ヌヴェーは30歳で飛行機事故により、世を去った。この日を追悼してTAHRAレーベルは、高い芸術的価値のある未発表の録音を取めたCDのリリースを企画した。その実現にあたっては、ヌヴェーの姉であるパレ夫人の協力をいただいた。心より感謝の意を表したい。また、夭折の芸術家の生の声を伝えてくれる貴重なインタビュー2件を掲載した。

ヴァーシャ・ブルジーホダ、ギラ・ブスタボ、ユーディ・メニューイン、オシー・レナルディ、ゲルハルト・タシュナーらと共に、ジネット・ヌヴェーは20世紀の天才児の中に間違いなく数えられるだろう。彼女は1919年8月11日、パリに5人兄弟の末っ子として生まれた。著名な作曲家兼オルガニスト、シャルル＝マリイ・ヴィドールは彼女の大伯父にあたる。ヴァイオリニストであった母はヌヴェーの最初のヴァイオリン教師であった。レオポール・ベラン国際コンクールの最優秀賞(1929年6月)、パリ・コンセルヴァトワールで1等賞(1931年)を受賞した。天才少女は、ラヴェルの《ツィガーヌ》の演奏によって審査員たちにその才能を認められた。

ヌヴェーはリヌ・タリユエル、ジュール・ブーシュリにヴァイオリンを習い、後にカール・フレッシュに師事(1931-35)、その教えは彼女に大きな影響を与えた。7歳の時にコンセル・コロンスと共演したブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番により音楽界にデビュー、15歳でワルシャワのヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクールのグランプリを獲得、その180名の候補者の中には、かのダヴィッド・オイストラフもいた。そして1930年代末、ベルリンで彼女は初めてのレコーディングを行った。1935年11月6日にオイゲン・ヨッフム指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、1936年10月30日にはフランクフルトでウィレム・メンゲルベルクと共演した。

大戦中はシャルル・ミュンシュ指揮のバリ音楽院管弦楽団と度々共演。1943年6月23日には、パリでヘルマン・アーベントローートの指揮でベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏した。戦後、ヘルマン・シェルヘンはヌヴェーをウィンタートゥールに招き、ブラームスのヴァイオリン協奏曲の公演を行い(1945年11月28日)、カラヤン指揮ウィーン交響楽団とも演奏した(1946年5月18、19日と1948年4月17、18日)。1946年8月には、アビーロードのスタジオでブラームスのヴァイオリン協奏曲をイサイ・ドブローウエン指揮で録音した(彼女は前年の1945年11月に、ワルター・ジュスキント指揮のフィルハーモニー交響楽団とともに、シベリウスの協奏曲全曲の素晴らしい演奏をたった一日で録音している。ベートーヴェンとチャイコフスキーの協奏曲の収録計画があったが、残念ながらそれは残された時間

が許さなかった)。1947年10月24、25日には、ボストンでアメリカでのデビューを果たし、ミュンシュ指揮のニューヨーク・フィルハーモニック交響楽団(1947年11月13、14日)、セルゲイ・クーセヴィツキー指揮のボストン交響楽団(1947年12月23日)などのもとで公演を行った。アメリカの新聞、特にニューヨーカー達は称賛を惜しまなかった。

『ヘラルドトリビューン』『ブラームスはジネット・ヌヴェーの虜になったに違いないと私は確信している』(ヴァージナル・トンプソン)

『ニューヨーク・サン』『彼女はまちががなく、聴衆を魅了する確実なリズムと同時に理にかなった熱情をも自らの音楽の中に吹き込むことができる、一流のヴァイオリニストである』(アーヴィング・コロデン)

『ワールド・テレグラム』『音楽の知性と詩情とエネルギー、強烈な個性と感性から創られたバリジェンス。舞台の上で、黒髪と長身が印象的な少女は、威厳のあるステージマナーで聴衆を魅了した』(ロバート・ベイガー)

『ザ・タイムス』『彼女は、気高いまでに均衡のとれた音楽的着想と感受性によって裏うちされた力強さと情熱をもって演奏した。その激しくとばしるような演奏は、楽器の持つ力の限界を試しているかのようだ。彼女は指先まで音楽家であり、その演奏は真摯さと強い個性が凝縮されていると同時に、気高いまでの節度を保っている。その精神の淀みのなさは、音楽をさらにドラマティックな時間へと導く。そこでは美しく透明度の高い

精細な音色だけではなく、荒削りの弦さばきや心臓の鼓動をかき乱すようなオクターヴ奏法のパッセージも、思いのままに操られる。このような刺激的なブラームスのヴァイオリン協奏曲をこの街で聴いたのは、何シーズンぶりだろうか。若さがみなぎる情熱と巨匠の威厳と抑制とがともに寄り添うような演奏を」(オリン・ドーンズ)

1948年5月3日、ハンブルクでヌヴェーはハンス・シュミット=イッセルシュテット指揮のもとでブ



兄のジャン=ポール・ヌヴェーとともに

ラームスのヴァイオリン協奏曲を演奏した(高い技術力の録音がその忘れがたい夜の思い出を記録してくれている)。運命の年である1949年は、シカゴでのオーマンディが指揮する3つのコンサートから始まった。6月3日にミュンヘンに戻ったヌヴェーは、パリ音楽院管弦楽団と共演、同19日にはストラスブル音楽祭に出演した。9月2日、サラ・ベルナール劇場で兄のジャンとともにリサイタルを開き、同25日、バーデン・バーデンでハンス・ロスバウトとともにベートーヴェンのヴァイオリン

協奏曲を披露した。10月12日から15日まではシベリウスのヴァイオリン協奏曲をジョン・バルビローリ指揮のハレ管弦楽団と共演した。その時の評論には「彼女は豹のような猛々しさと演奏した」と書かれている。10月20日にパリで、彼女の最後となるリサイタルが、いつもどおり兄ジャンと共に開かれた。パンフレットにはこのように書かれている。「ジネット・ヌヴェーのデビューは、かつての天才児たちの中でも燦然と輝くものであり、今日、われわれフランス音楽界での第1人者のひとりに数えられるのは明らかである。また、パリでの数々の成功と近年の海外での活躍は、彼女の

さらに磨きのかかりつつある風格と同時に兄ジャン・ヌヴェーのピアニストとしての才能をも証明している。彼女が1946年3月に行ったりリサイタルを忘れる者はいないだろう。そして今回のリサイタルで演奏された、魅惑的であると同時に強烈なブラームスのソナタは、さらに新しい栄光をそこに加えるものである。そして特に注目すべきことは、バッハの〈シャコンヌ〉で彼女が見せた比類ない激情と威厳である」。そして10月29日、アメリカでのツアーに向けてふたりはオルリー空港の山に激突した。ボクサーのマルセル・セルダンもその便の乗客のひとりであった。

流星のごとく瞬く間に花開き、その栄光を約束されていた彼女のキャリアはこの悲劇的な事故により早すぎる終わりを迎えた。わずか30歳のことであった。11月6日、バルビローリの指揮するハレ管弦楽団は、ヴェルディの《レクイエム》を彼女のために捧げた。聴衆はあえて拍手を控えたという。

Inrerview I (1949. 3. 5)

Q:ヌヴェーさん、あなたがここ数カ月で、アメリカや諸外国での演奏旅行で華々しい凱旋を成し遂げたことは周知の事実です。またあなたが近々シャルル・ミュンシュと共演することも知られていますが、あなた自身の口から詳しい説明を聞かせていただけますか?

G:もちろん、喜んで。確かに、私は6月3日にシャ

ルル・ミュンシュ氏の指揮でパリ音楽院管弦楽団と演奏する予定です。

Q:あなたのようなソリストとミュンシュ氏のような指揮者の共演とは、まさにアメリカ人がよく言う「センセーショナルな出来事」です。アメリカではすでに共演したことがあるのですよね?

G:そうです。何度かニューヨーク・フィルハーモニックと共演しましたが、すべてシャルル・ミュンシュ氏の指揮でしたから。

Q:あなたが私たちから遠く離れている間に、あなたは非常に興味ある音楽的経験をされたことと思います。私たちがここでお聞きしたいことのひとつは、国の違いによる聴衆の好みの違いについてです。私の思い違いでなければ、アメリカ人の演奏は一般的に言ってヨーロッパよりもテンポが速いのではないですか。

G:2回のアメリカ演奏旅行でフィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、クリーヴランド、ピッツバーグ、ミネアポリス、他にも様々な都市に行きましたが、アメリカについての私の印象は次のように言えると思います。アメリカの聴衆は、以前にも増して、演奏家の個性や、作品の解釈や演奏法に注目するようになってきています。けれど、私の個人的な経験では、どこの国の聴衆も皆、美しいものに対して熱く反応するものです。

Q:作曲家について少し伺いましょう。世界中をまわられて、新しい作曲家や、レパートリーに加えたいような作品との出会いはありましたか?

G:前回のアメリカツアーではアメリカの作曲家の作品を演奏する機会はありませんでした。けれ

どアメリカの作曲家についてはいろいろと話を聞きましたし、その中のひとりの私が尊敬する、サミュエル・バーバー氏に会うことができました。私はフランスや諸外国の近代や現代の作品を多く演奏しますが、その中でもラヴェル、ドビュッシー、ポーランドの作曲家カロル・シマノフスキ、チェコのヨセフ・スクの名を挙げておきましょう。

Q: ヨセフ・スクの名前が出ましたが、彼について少しお話しただけませんか?

G: もちろん、喜んで! ご存知のとおり、ヨセフ・スクは1874年、クレチョヴィーチェに生まれたドヴォルザークの教え子でした。その上、彼はドヴォルザークの娘と結婚していました。その作品には師の影響が色濃く反映されています。

Q: それではヨセフ・スクの作品を聴かせていただけるようあなたにお願いするよいタイミングですね。われわれの聴衆を喜ばせていただけますか?

G: もちろんです。兄ジャン・ヌヴェーと私とで、ヨセフ・スクの《ヴァイオリンとピアノのための4つの小品》の中の最後の曲、《ビュルレスク》をお聴かせしましょう。

Inrerview 2 (1949. 9. 10)

Q: それでは、今回、このエディンバラ国際フェスティバルへの参加で熱い興奮を巻き起こしているジネット・ヌヴェーさんにお話を伺います。あなたがこのエディンバラで演奏されるのは初めてですね。あなたはイギリスでとても人気があり著名でもあるのに、エディンバラの人間はまだあな

たのヴァイオリンの音を聴いたことがありません。G: 確かに、これが私の初めてのエディンバラ国際フェスティバルです。イギリスやスコットランドでは何度も演奏しましたが、このフェスティバルには参加したことがありませんでした。昨年、参加依頼を打診されましたが、あいにく、私はその頃オーストラリアにいたのです。

Q: 確かにそれは少しばかり遠いですね。あなたはバリ音楽院管弦楽団と共演されたほかにも、お兄様のジャン・ヌヴェー氏とともに素晴らしいソナタのリサイタルを開かれています。

G: はい、そのとおりです。

Q: そしてフランクのヴァイオリン・ソナタを演奏されました。

G: そうです。セザール・フランクの《ピアノとヴァイオリンのためのソナタ》イ長調と、ドビュッシーやフォーレのヴァイオリン・ソナタも演奏しました。

Q: 聴衆のその3作品への反応は素晴らしいものでした。次はジャン・ヌヴェーさんに伺います。妹さんとの共演はずっと昔からだったのでしょうか。それとも最近からですか。

J: じつは、もう何年も前からふたりで演奏しています。戦争中は外国への演奏旅行ができなかったため、室内楽を中心に演奏活動をしていたことがきっかけです。イヴ・ナットと共演する特別なコンサートで、私たちがフランクのソナタを演奏することができたということも言うておかなくはなりません。彼は、言うまでもなく、ウジェーヌ・イザイのヴァイオリンとともに、フランクのソナタの偉大な解釈者です。戦争が終わるとすぐ

に、私は姉に伴って海外の演奏旅行に行くようになりました。室内楽、ソロ・リサイタルに限らず、それは途切れることなく4年間続いています。

Q: ジネットさんに伺います。シベリウスのヴァイオリン協奏曲を選んだのはなぜでしょうか?

G: フェスティバルの主催者側からこの曲を演奏してほしいとの依頼があったのです。この作品はイギリスやスコットランド、そしてスカンジナビア諸国やアメリカでもとてもよく知られている曲です。私自身もこの曲を演奏することは大きな喜びでした。私は、イギリスでこの曲をレコーディングをしたのですが、その都度演奏する喜びと、また、新しい自分の演奏を発見するという喜びもありました。

Q: この作品はヴァイオリンのために書かれた素晴らしい作品ですし、ヴァイオリニストにとってはその演奏は非常に魅力的なものでしょうね。

G: そうです。まさにヴァイオリンのために創られた美しい作品です。同時に、オーケストレーションの部分も世界中で聴かれるに値するものだと思います。

Q: あなたが演奏すると、われわれは作曲家にどれほどのものを負っているのかわからなくなるほどです。つまり、あなたの炎のような演奏を聴くと、作曲家と演奏家の境目がわからなくなるのです。もし私がヴァイオリン協奏曲を作ったとしたら、もちろんたいした作品にはならないでしょうが、あなたにぜひ演奏していただきたい。ところで、あなたの好きなヴァイオリン曲は何かと訊ねたくなってきました。

G: 私はもちろん、一般的にいえば、音楽のすべての要素、すべてのメロディの基盤をなしているクラシック音楽が好きです。けれど、フランスやその他の国の現代音楽や近代音楽にも非常に興味を持っています。

Q: ヴァイオリニストとしてのあなたを満足させるような現代の協奏曲はありますか?

G: 特に強い印象を受けて、私を魅了したのはアルチュール・オネゲルの新しいソナタと、有名なウィリアム・ウォルトンの素晴らしい協奏曲です。Q: あなたはバリではあまり演奏されませんが、何故でしょうか?

G: 私は次々とアメリカや外国から招かれたために、2年の間、バリで演奏することができませんでした。けれど、昨年春には、アメリカから帰ってきた時に、シャルル・ミュンシュ指揮でバリ音楽院管弦楽団と共演することができました。ごく最近には、兄とフランスのソナタを集めた演奏会を開きました。また、今度アメリカに発つ前の10月20日、サル・ブレイエルで1回だけリサイタルを開く予定です。

Q: すぐに日程をメモしておきます。それでは、またお兄様と一緒にリサイタルですね?

G: そうです。演奏予定の曲は、ヘンデル、バッハ、ブラームス、シマノフスキ、そしてラヴェルです。Q: ラヴェルはソナタですか? それともツィガースですか?

G: ツィガースになると思います。

Q: あなたが演奏されるツィガースをぜひ聴きたいものです。他にはどのような予定がありますか?

G: 10月末に、私と兄はアメリカに4カ月間の予定で滞在します。その後、ヨーロッパに戻り、来年の夏までヨーロッパ中で演奏します。それから南アフリカへ行きます。

Q: 素晴らしい。楽しみです。ありがとうございました。

(フランス語翻訳: 五島美穂)



profile ————— 河原 融

ジネット・ヌヴェー

Ginette Neveu (1919-49)

1919年8月11日、パリの音楽一家に産まれたジネット・ヌヴェーは、ヴァイオリンの教師をしていた母親の下で幼くしてヴァイオリンを手にし、早くも7歳の時にはサル・ガヴォーでブルッフのコンチェルトを弾いて公式のデビューを飾ったという。そして10歳にしてジョルジュ・エネスコにしばらく教えを受けた後、30年にはパリ音楽院に入学して、ジャック・ティボーの盟友であり、ヘンリック・シェリング、ドゥヴィ・エルリ、ジャニース・アンドラード、ミシェル・オークレール、ローラ・ボベスコ、ミシェル・シュヴァルベ、クリスティアン・フェラスといった数多の逸材を育てた名教授ジュール・ブーシュリのクラスで学ぶことを許される。しかもそこでは、87年前のヴィエニャフスキの前例同様にわずか8ヶ月という短期間でその課程を終了して周囲を驚かせた。またパリ音楽院在学中にはナディア・ブーランジェにも就いて学び、作曲にも手を染めている。31年、ウィーンで開かれた国際コンクールに出場するも、この時は第4位に終わった。しかしその機会にカール・フレッシュの目にとまったヌヴェーは翌年その門下に加えられてベルリンへ留学。以後4年間この名教授の下で一層の研鑽を重ねることになる。そして35年、フレッシュの慫慂で、生誕100年を記念して開かれたヴィエニャフスキ・コンクールに出場。今度は圧倒的な評価を得て第1位となる(因に、第3位もヌヴェーと

ジブーシュリ門下のアンリ・テミアンカ)。この際に彼女に次いで第2位だったのは、誰だろう 20世紀を代表するヴァイオリニストとして大成することになるダヴィッド・オイストラフだったが、彼も妻宛の手紙でこの結果への納得を書き送っているほどの勝利であった。そしてヌヴェーはこの大きな成果を足場に国際的なキャリアを歩み始めることになる。ヌヴェー優勝の報に接したティボーはブーシュリ宛に書簡を差し、「ヌヴェーが何よりブーシュリの弟子、即ちフランコ=ベルギー楽派に連なるフランスのヴァイオリニストであって他の何者でもないはずだ」と、今となっては時代を感じさせる素朴な愛国心をさらけ出した熱弁をもって語ったが、皮肉にもヌヴェーの才能に逸早く熱狂したのはやはりドイツであった。ハンブルクでブラームスのコンチェルトを演奏したのを始め、ミュンヘン、そしてベルリンでも大きな成功を収める。36年にはソヴィエト、北米へも演奏旅行に招かれてその国際的な名声は一層高まり、30年代後半のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会にヌヴェーは繰り返しソリストとして登場。そのレコーディング・アーティストとしての活動もベルリンで始まった。第二次大戦が始まるとパリに留まり演奏活動を縮小せざるを得なくなるが、それでも41年にはボール・バレーの指揮でベートーヴェンのコンチェルトを演奏、43年には自らブーランクに委嘱したヴァイオリン・ソナタを作曲家のピアノで初演したりしている。戦後はロイヤル・アルバート・ホールでのロンドン・デビュー公演を皮切りにイギリスへも繰り返し演奏旅行に訪れ、ヌヴェーに注目したウォルター・レッグは早速彼女と専属契約を

締結、シベリウスの協奏曲を始めとするまとまった量のスタジオ・レコーディングが遺されることになった。かくしてヌヴェーのキャリアは戦後の新しい世界の幕開けと共に大きく花開こうとしていたが、49年、4度目のアメリカ演奏旅行に向けて10月20日にパリで「お別れコンサート」を開いた後、パリ音楽院でイーヴ・ナットに学んで同門下の逸材として知られ42年以降は妹の専属伴奏者となって彼女を芸術の深化を支えた兄のジャン=ポールと共に機上の人となった10月28日、そのエール・フランス"コンソレーション"機がポルトガル領アゾレス諸島サン・ミゲル島の山腹に墜落。兄と共に30歳でその生涯を終えた。

ハンス・ロスバウト

Hans Rosbaud (1895-1962)

1895年7月22日、オーストリアのグラーツに産まれたロスバウトは、ピアニストで音楽教師でもあった母親から最初の手解きを受けて5歳からピアノを始めとする様々な楽器に親しみ、長じてはドクトル・ホーホ音楽院(現フランクフルト音楽及び舞台芸術大学)に進んでピアノや作曲を学ぶ。音楽院での対位法の講義では若きヒンデミットと机を並べた。21年には公営化されたばかりのマインツ市立音楽学校の校長に就任。そして同地の市立交響楽団の楽長の地位を兼ねてそのキャリアの第一歩を記す。マインツでは早くもヒンデミット、シェーンベルク、ストラヴィンスキーらの作品を演奏してセンセーションを巻き起こした。28年にはフランクフルト放送の音楽監督となり37年まで在任。放送交響楽団を指揮しての演奏活動だけでなく、ワーグナーの「指環」などの作

品を解説付きで放送するといった新しい趣向の音楽番組の企画や運営にも広く関わった。このフランクフルト時代には、引き続きヒンデミットやストラヴィンスキーの作品を積極的に紹介しただけでなく、新ウィーン楽派の作品の演奏を通じてその面々、特にウェーベルンとの親交を深めた。しかし、33年1月にバルトークのピアノ協奏曲第2番を作曲家をソリストに迎えて初演した直後にナチが政権を掌握するに至ると、フランクフルトでのロスバウトの活動は一気にその自由を奪われていくことになる。37年には、少しでも自由な演奏活動の余地を求めてミュンスターのGMDへ、さらに大戦中は占領地のストラスブルヘと漂泊を余儀なくされる。終戦後は、先ずミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の再建を担う。そして終に48年には、音楽部長シュトロー



ベルと、ブルゴーニュワインを扱う著名なワイン商で戦前は音楽評論家としても活動し、対独レジスタンス運動への支援を通じて戦後はフランス軍政当局文化部門の責任者となって新しい放送局の創設に関わっていたピエール・ボネル（後にオペラ演出家として名を成すジャン＝ピエールの父）によって南西ドイツ放送交響楽団の首席指揮者の地位に迎え入れられることになった。ロスバウトは62年に亡くなるまでの地位に在って、戦後の前衛音楽の最も強力な擁護者としてブーレーズやシュトックハウゼンの初期の作品を初めとする数多の同時代音楽を紹介しただけでなく、モーツァルト、ベートーヴェンからブルックナー、マーラー、さらにR.シュトラウス、メシアンといった広汎なレパートリーにおいても、楽曲の骨格を独自の視点で明瞭にした説得力ある解釈を聴かせた。また、50年以降はチューリヒ・トーンハレ管弦楽団との関係が深まり、57年にはその音楽監督にも就任して同地のオペラでも活動。そして57年にはチューリヒでシェーンベルクの歌劇「モーゼとアロン」を初めての舞台上演にまでこぎ着ける。戦後のロスバウトの活動は南北アメリカ大陸の主要都市からトルコ、南アフリカにまで及んだ。1962年12月29日、スイス、ルガーノで逝去。

南西ドイツ放送交響楽団 Südwestrundfunk-Symphonieorchester

1946年2月1日。南西ドイツ放送交響楽団は、ドイツ敗戦後にフランス軍占領地域とされたバーデン州の古来より温泉保養地として名高いバーデン＝バーデンで設立された。初代の首席指揮者は、戯曲「賢

者ナータン」で知られる啓蒙期ドイツの代表的思想家レッシングと同姓同名のゴットホルト・エフライム・レッシング。南西ドイツ放送交響楽団は、戦前、かのヘルマン・シュルヘンが創刊した新音楽のための雑誌「メロス」の編集長を務め、戦後は同放送の音楽部長となったハインリッヒ・シュトローベルのリーダーシップの下で同時代音楽の擁護者というはっきりとしたキャラクターを持つ楽団として出発することになったが、それにはバーデン＝バーデンという街の歴史的な性格が背景としてあった。ローマ時代からその温泉が知られていたバーデン＝バーデンは、19世紀に入って改めて高級温泉保養地として整備され、折からの鉄道インフラの整備が相まって多くの旅行者を集め、「シュバルツバルトの真珠」という令名をもってヨーロッパ全土にその名が知られる存在となっていったが、その過程で長期滞在する上層市民階級の人々の文化的興味関心に応えるべく音楽的にも重要な中心地となっていく。19世紀中頃にはベルリオーズも同地で開かれるようになっていた音楽祭に來演し自作を指揮。この音楽祭は80年代には一層盛んになり内外の作品の初演が続いてバーデン＝バーデンは最先端の音楽が紹介される地となった。20世紀に入ってもその隆盛は引き継がれてヴァイル、ヒンデミット、ミヨーらの新作が次々と紹介されていった。このようなこの地特有の文化的背景の下でクアハウスのオーケストラを引き継いで発足した南西ドイツ放送交響楽団は、ワイマール期の音楽文化を象徴する人物であった亡命者オットー・クレンペラーを戦後逸早くその指揮台に招いたし、48年にはシュトローベル意中の人物であったハンス・

ロスバウトを首席指揮者に迎えて一層の発展を遂げることになる。その年創設されたばかりのエクサン・ブロヴァンス音楽祭にはモーツァルトの「コシ・ファン・トゥッテ」上演にロスバウトに率いられて参加、またシュトローベルが再興に尽力したドナウエッシンゲン音楽祭ではその再出発の年となった50年以降、中心的役割を果たす。62年にロスバウトが亡くなること、その首席指揮者の地位はエルネスト・ブール、カジミエシュ・コルト、そしてミヒャエル・ギーレンから、シルヴァン・カンブルランへと、一貫して同時代音楽を得意とするそれぞれの時代の代表的音楽家によって占められてきた。南西ドイツ放送交響楽団の歴史は、そのシェフの人選に端的に象徴されているように、ドイツとその西に位置するフランス及び東のポーランドという、それぞれに戦後の現代音楽を牽引する重要な作曲家を輩出し続けた二つの隣国を視野に入れて汎ヨーロッパ的なコンセプトに貫かれて来たといえようが、2011年に首席指揮者に就任し、この特異な伝統にさらに新たな1ページを加えようとしていたフランソワ＝ガザヴィエ・ロトの在任期間の終わりをもって、残念ながら、シュトゥットガルト放送交響楽団との統合という形でその終焉を迎えようとしている。

ロジェ・デソルミエール Roger Désormière (1898-1963)

1898年、フランス中部のヴィシーに産まれたデゾルミエールは、パリ音楽院に進みフィリップ・ゴベールにフルートを、さらにケ克蘭とダンディに作曲を師事。音楽院卒業後、先ずパリのオーケスト

ラにフルート奏者として入団。21年頃にはアンゲル・プレシュトが創設したコンセル・ブレイエルで指揮者デビュー。他方でサティにも私淑した彼は、23年にソーゲたちと共に「アルクイユ楽派」の旗揚げにも参加している。24年には、「黄金の20年代」と謳われた当時のパリにおける大立物でアヴァンギャルドな芸術活動のパトロンだったエティエンヌ・ド・ボーモン伯爵の主催したソワレ・ド・パリのバレエ公演において、ミヨーの「サラダ」、サティの「メルキール」の初演の指揮を任される。また同じ公演で共に舞台にかけられたマシン振り付けの「美しきダニユーヴ」のためにJ.シュトラウスの音楽を編曲し、コクトー台本の「ロメオとジュリエット」のために付随音楽の作曲をも担当した。続いて24年



から25年にかけては、パリでディアギレフのロシア・バレエ団と人気を競いながらも短命に終わったスウェーデン・バレエ団の指揮者を務め、スウェーデン・バレエ団が解散すると今度はロシア・バレエ団に招かれてディアギレフの死によるバレエ団の解散までその地位に留まった。そしてその間にはストラヴィンスキーの「ミューズの神を率いるアポロ」、プロコフィエフの「放蕩息子」などの公演で初演のタクトを委ねられている。ロシア・バレエ団を離れた後、デゾルミエールは古楽協会を設立、主宰し、クーブラン、ラモーを始めとする17、18世紀のフランス・バロック音楽、さらにルネサンス音楽の楽譜や文献を広く収集し校訂出版するだけでなく、自らこれらを明敏にして説得力ある演奏で聴衆の耳に届けることにより、フランスにおける古楽復興においてもその啓蒙と普及に先駆となる業績を遺した。デゾルミエールの音楽は、パリのアヴァンギャルドの芸術運動に深く関わった彼の経歴から想像しうのような激しい性格のものとは一線を画し、理知的な明晰さに基礎を置きつつも、寧ろ同時代のウィーンの巨頭クレメンス・クラウスと一脈通じるような精妙なリズムの扱いと繊細なアーティキュレーション、加えてディナーミクの力感に頼ることの無く音楽を造形する貴族的な雅致とに特徴を有していた。また、デゾルミエールは映画音楽の分野でも活躍。34年、第1回のフランス・シネマ大賞グランプリに輝いたジュリアン・デュヴィヴィエ監督の名作「白い処女地」の音楽の作曲に関わり、46年のカンヌでパルム・ドールを獲得したジャン・ドラノワ監督の「田園交響楽」ではオーリックが作曲したサントラのためにタクト

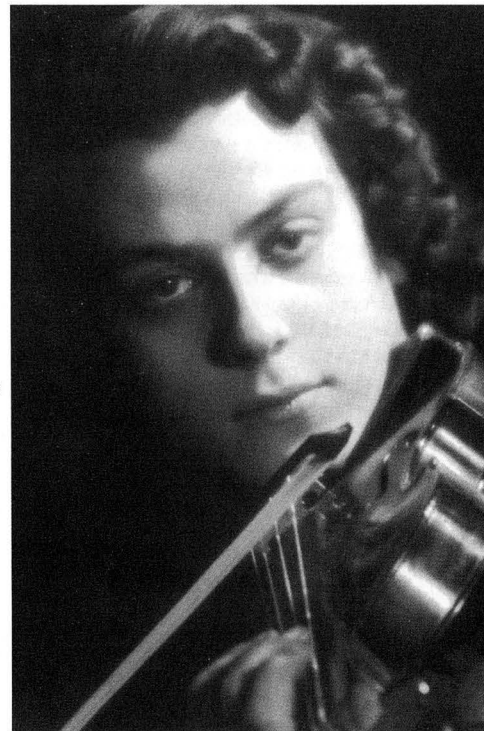
を採っている。37年にはパリ・オペラ・コミック座の常任指揮者、大戦中は占領下のパリで音楽家の連帯による文化的なレジスタンス活動を展開し、44年から46年にかけてパリ・オペラ座の准監督をも務めた。そして47年にはフランス国立放送管弦楽団の首席指揮者という彼に相応しい地位にも就くが、52年、ローマで自らハンドルを握って車を運転中に脳梗塞の発作に襲われ、命を落とすことは免れたものの失語症の後遺障害によって楽壇からの引退を余儀なくされるという悲劇でそのキャリアは断たれた。1963年10月25日、パリにて長逝。

フランス国立放送管弦楽団

Orchestre national de la radiodiffusion française

フランス国立放送管弦楽団は、フランス国営放送の専属オーケストラとしてドビュッシー解釈の権威として知られたデジレ・エミール・アンゲル・プレシュトを首席指揮者に戴いて1934年に設立された。当時、放送の持つ社会的機能が急速に認知、拡大される時代状況の中で、放送局専属のオーケストラとしては、1930年のBBC交響楽団設立に次ぐものであった。また、国営放送専属という性格上、フランス国立放送管弦楽団は、音楽院の教授達を背景とするバリ音楽院管弦楽団や、名物指揮者の名の下で共同事業組合的に活動していた各演奏会協会のオーケストラのような楽団員の自主性の強いアンサンブルとは基盤を異にし、フランスのアンサンブルらしい明断な響きをもちつつも、当初から高い機能性を誇る近代的なアンサンブルとして出発した。そのことは、デュクレテ・トムソン・レーベルにシャンゼリゼ劇場管弦

楽団という名で吹き込んだアンゲル・プレシュトとのドビュッシー、ラヴェルの作品を始めとする多くのレコードで当時から広く知られるところでもあった。その後大戦中の活動中断を経て、ラヴェルの高弟マニユエル・ロザンタールを得て再始動。放送交響楽団一般の役割として特に自国の同時代作品の演奏を使命の一つとしており、それを可能にするべく、ロザンタールの後も、ロジェ・デゾルミエール、モーリス・ルルーを経てジャン・マルティノンに至るまで、それぞれの時代に応じ、自身が作曲家、あるいは同時代の作曲家との共同作業に熱意があるといった形でその使命に相応い目されるフランス人の常任指揮者が人選されてきた。また、その高い演奏能力を反映して、シューリヒトを始め、ビエール・モントゥー、ブルーノ・ワルター、ヨーゼフ・クリップス、カール・ベームといった内外の名指揮者も多く客演してシーズンを彩った。しかし、1974年にチャリビダッケを首席客演指揮者として迎え、彼との短い蜜月の後も76年にマゼールに始めやはり首席客演指揮者として、後には音楽監督として90年までの長期間シェフとして指揮台を委ねる中でフランス国立放送管弦楽団は徐々にフランスを代表するインターナショナルなアンサンブルとしての色彩を強めて行った。この間、1975年にはラジオ・フランスの組織改革に伴って、フランス国立管弦楽団へとその名称も変更。近年はシャルル・デュトワ、クルト・マズアの音楽監督時代を経て、2016年からコンセルト・ヘボウ管弦楽団首席指揮者に就任する実力者ダニエレ・ガッティと、2008年以来充実した活動を繰り返して現在に至っている。



1. Private archive of Mrs.Barret,sister of
Ginette Neveu
2. With Hermann Abendroth
3. With Jean-Paul Neveu and Marcel Cerdan,
at Orly Airport 28th, 10, 1949
4. Private archive of Mrs.Barret, sister of
Ginette Neveu
5. With Charles Munch
6. Private archive of Mrs.Barret, sister of
Ginette Neveu

●ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 77

1878年、45歳のときに作曲されたブラームス唯一のヴァイオリン協奏曲である。長年の辛苦の末によりやく交響曲第1番を完成させた1876年以降、ブラームスは、ともすれば内向的になりすぎ、自らの音楽的感情や思想を効果的に形にする手前で立ち止まってしまうがちな性向から一気に脱却し、1880年まで壮年期の創作のピークを迎える。それはおもに、ブラームスが自らの音楽的感情や思想を十全に表現するための音楽構成上の語法を獲得したことによるところが大きい。すなわち、短い動機からなるいくつかの展開をメロディ風に用いたり、複数の旋律の断片的な要素をちりばめながら、それらに内在する主要動機によって統一を図るといった手法である。

このヴァイオリン協奏曲も、そうした壮年期の特徴をよく示しており、とくに第1楽章の主題構成などには、第1交響曲やこの曲の前年に作曲された第2交響曲で試みられた手法が、さらに巧みでこなれたかたちで用いられ、より自在でのびのびした展開を見せている。もちろん、ヴァイオリンという旋律楽器による古典的な形式の協奏曲であることも影響しているだろうが、そうした伸びやかさが

交響曲の作曲によって培われた独自の音楽語法に基づく楽曲構成と一体となっており、この作品の大きな特徴があるとともに、この作品をロマン主義を代表するヴァイオリン協奏曲としている大きな要因となっている。また、この協奏曲が、調性的に同じ交響曲第2番（ともに二長調）が作曲されたのと同じ、ユーゴスラヴィア国境に近いアルスター湖畔のベルチャッハで作曲されたという環境的な要因も曲想に影響しているだろう。

この曲の成立には、当代きっての名ヴァイオリニストであったヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）との交流が深くかわっていることはよく知られた事実である。しかし、たしかに、ブラームスは、作曲の過程のなかでヨアヒムに助言を求めて手紙をいくつも書き送っているが、それは具体的な助言を求めるよりも、確認作業であったり、自身の作曲過程を報



ヨーゼフ・ヨアヒム

告したりすることのほうが多かった。こうしたところにも時に意気消沈しながらも自身の信念には頑ななブラームスの性格の一面が垣間見える。翌年の1月に、ヨアヒムを独奏者に迎えて初演されたときも、技巧的に難しいことで有名な第1楽章の10度音程の重音奏法の連続部分をはじめ、ヨアヒムは具体的に改変のアドヴァイスをしているのだが、ブラームスはほとんどそれに従わなかった。とはいえ、有益な助言を惜しまなかったヨアヒムには感謝の気持ちも大きかったようで、ブラームスはこの作品を、ヨアヒムにさげている。

第1楽章：アレグロ・ノン・トロppo 二長調 3/4



ヴァイオリン協奏曲第1楽章、ヴァイオリン独奏の提示部

ソナタ形式。

管弦楽の序奏を持った古典的なスタイルだが、主題構成に大きな特徴を持つ。第1提示部とも言える序奏部冒頭に提示される第1主題のあとに、いかにもブラームスらしいいくつもの断片的な主題的要素が示されるが、そこでは第2主題は現れず、第2主題は主部に入ってから独奏ヴァイオリンによって初めて提示される。

第2楽章：アダージョ へ長調 2/4 三部形式。

ブラームスは、当初これとは別のアダージョ楽章とスケルツォの2つの中間楽章を準備していたが、あとになってこのアダージョ楽章に差し替えられた。

ブラームス自身「弱々しいアダージョ」といった、内省的なアダージョ楽章である。

第3楽章：アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロppo・ヴィヴァーチェ 二長調 2/4 ロンド・ソナタ形式。

作曲時には「アレグロ・ジョコーソ」という指定だけだったが、ヨアヒムの「ジョコーソ（陽気に、おどけて）では難しい」という指摘を受けて、「ノン・トロppo・ヴィヴァーチェ（快活すぎず）」を加えた。ジョコーソというにふさわしい、ジブシー風のロンド主題が特徴的である。

●ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 61

ブラームスのヴァイオリン協奏曲の成立過程に、ヴァイオリニストのヨアヒムが関与していたことは前項で触れたが、そのヨアヒムはベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲にも深い関わりがある。もちろん、1831年に生まれたヨアヒムがベートーヴェンの協奏曲の成立に直接かかわっているはずはない。ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲が作曲されたのは、交響曲第4番と同じ年の1806年である。

今でこそメンデルスゾーン、ブラームスの協奏曲とともに古典・ロマン派を代表するヴァイオリン協奏曲の筆頭にあげられるこの作品だが、初演時には聴衆から喝采をもって受け入れられた記録はあるが、それはほぼ初見で演奏したアン・デア・ウィーン劇場のコンサートマスター、フランツ・クレメントに対するもので、ウィーンの新聞は作品については「脈絡がなく支離滅裂」「関連もなく積み上げられる楽想の数々」など、散々の言われようで、初演以降あまり演奏される機会がなかった。そこに光あてたのがヨアヒムで、彼は半ば歴史の流れに置き去りにされかけていたこの作品を高く評価して生涯にわたって演奏し続けた。メンデルスゾーンの《マタイ受難曲》復活上演とまではいかないまでも、ヨアヒムのおかげで、この作品の真価が広く世に知られることになったことは確かだ。

単旋律楽器であるヴァイオリンのための協奏曲は、バロック時代に隆盛したものの、古典派以降はあまり作曲されていない。モーツァルトでも5曲、多作家のハイドンでも4曲である。しかも、彼らの場合は、ヴァイオリンとオーケストラの関係は旋律楽器 vs 管

弦楽伴奏の域を出ることはなかった。しかし、ベートーヴェンの協奏曲は大きく異なっている。ヴァイオリンが単なる旋律楽器のヴィルトゥオジティを発揮するものとしてではなく楽曲の構造や構成に深く関与しているのである。ブラームスのヴァイオリン協奏曲がベートーヴェンから受け継いだのもまさにこの点だった。

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・トロppo 二長調 4/4 ソナタ形式。

ティンパニの *p* による5つの四分音符に続いて木管が伸びやかな第1主題を提示する。この5つの音型はいたるところに変形して登場し、この楽章の重要な要素にもなっている。初演で批判された「品のない反復」というのは、おそらくこのこと。

第2楽章：ラルゲット ト長調 4/4

弱音器をつけた弦楽合奏で穏やかで安寧に満ちた幸福な祈りにも似た主題が提示される。第3変奏までは独奏ヴァイオリンは主題を奏でることなくオブリガートで主題を彩る。

第3楽章：ロンド、アレグロ 二長調 6/8 三部形式。

第2楽章とは対照的に、ソロ・ヴァイオリンによる快活で弾むようなロンド主題が提示される。副次主題もソロ・ヴァイオリンが提示するなど、概してソロ・ヴァイオリンの晴れやかなヴィルトゥオジティ主導の楽章。なお、ベートーヴェン自身は第2楽章の簡素なカデンツァは作曲しているが、第1楽章のカデンツァは作曲していない。

(江森一夫)



Licensed by Tahra
Mastering: Keisuke Saito(Altus Music),
Takao Suga(King Sekiguchidai Studio)
Editorial : Kazuo Emori (amorfo)

©2016 Tomei Electronics "Altus Music" co., ltd.
All rights reserved Printed in Japan
<http://www.altusmusic.com> / E-mail: altus@altusmusic.com
Distributed by KING INTERNATIONAL INC. (JAPAN)

取り扱い上のご注意●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズなどを付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内側から外周に向かって放射状に軽く拭き取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を添付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用后、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。